

報告

「本島付随型」離島K島における生きがいつくりへの期待

- 住民主体による高齢者「ふれあい広場」への取り組みから -

大川嶺子¹⁾ 大湾明美¹⁾ 呉地祥友里¹⁾

小川なお子¹⁾ 佐久川政吉¹⁾

本研究の目的は、住民主体の地域づくりのモデル島として関わっているK島において、高齢者の生きがいつくり活動「ふれあい広場」誕生までの経過から、利便性の高い離島における生きがいつくりについて考察することである。対象地域は、本島南部のC村に属し、C村から船舶で15分の距離にある「神の島」として知られるK島。対象は、住民主体活動を行っているワーキンググループメンバー、平成14年2月現在、K島に住居登録している65歳以上の全高齢者110人中、「K島高齢者介護意識等調査」の有効回答者91名。平成15年2月現在、K島に住居登録している65歳以上の全高齢者115人中、「K島高齢者ニーズ調査」の有効回答者83人。方法は、平成14年9月～平成15年7月まで、月1～2回開催されたワーキンググループ討議全17回中、高齢者の生きがいつくり活動「ふれあい広場」誕生に関連すると考えられる12回の討議内容の検討。「K島高齢者介護意識等調査」から、生きがいつくりに関連する11問を抽出。「K島高齢者ニーズ調査」から生きがい作りに関する項目として「高齢者活動」の項目6問を抽出。平成14年3月から15年7月の高齢者の生きがいつくり活動「ふれあい広場」誕生までの経過について、上記2つの調査とグループ討議を検討した。

結果および考察：1) 神事を生きがいつくり積極的に活用することの重要性が示唆された。2) 介護の支え手の乏しいK島では、地理的利便性を生かし「郷友会」を介護マンパワーとして活用することで、高齢者の生きがいつくり展開の可能性があると考える。3) 住民主体活動としてのグループ討議は、個々人の「高齢者ニーズ調査」結果を基礎にし、ニーズに基づいた「ふれあい広場」活動の準備、実現に繋がった。4) 高齢者の生きがいつくりの場として誕生した「ふれあい広場」は、島内の交流の拠点にとどまらず、利便性を生かして島外施設入所者の生きがいつくりの場、郷友会など島外生活者のふれあいの場など、島外との交流の拠点としての展開を期待したい。

キーワード： 生きがい、離島、高齢者、住民主体

【はじめに】

沖縄県の離島は、厳しい社会的および自然条件などによる人口の流出や少子化に伴う人口減少、および高齢化が深刻な問題となっている¹⁾。また離島は、残された自然や人と人との交流の暖かさが、ストレスの多い都会人にとっての「癒しの空間」としての役割が注目を集めており、離島の有利性に着目した取り組みが推進されている²⁾。「離島振興法」では、我が国の276離島が類型化されている³⁾が、「沖縄振興開発特別措置法」で指定された沖縄の有人離島39カ所は類型化されていない。我々は、地域特性を生かした地域づくり支援を目的として、沖縄県の有人離島のうち架橋による陸路確保のある島や無人島を除く28島を行政区との関連で4タイプに類型化した⁴⁾。

その一つ「本島付随型」離島は、宮古島または沖縄本島の市町村に属し、主な島に近接している離島である。沖縄県の離島は広い海域に点在していることが特徴の一

つであるが、本島から近距離にあり利便性が高い「本島付随型」離島も5島ある。その5島は、人口規模が小さいこと、高齢化率が高いこと、介護保険サービスの基盤整備が乏しいことなどが特徴であり⁵⁾、利便性に関係なく高齢者支援体制の整備が急がれる。高齢者支援体制は、介護保険法施行に伴い、要介護認定者のための介護サービスの基盤整備に重点が置かれてきた。しかし、8割以上の高齢者は自立高齢者であり、自立高齢者の健康づくりや生きがいつくりは、重要な課題である。また在宅高齢者のみでなく、島を離れた施設入所高齢者の生きがいつくりとして、住民主体活動の中で実施されている一時帰省「ふるさと訪問」は、家族や地域の生きがいつくりにも繋がる事が報告されている⁶⁾。同様に住民主体による高齢者「ふれあい広場」への取り組みも住民全体の生きがいつくりへの展開が期待できると考える。本研究の目的は、住民主体の地域づくりのモデル島として介入しているK島における、高齢者の生きがいつくり活動「ふれあい広場」誕生までの取り組みから、利便性があり、人口規模が小さく、高齢化率が高い「本島付随型」

1) 沖縄県立看護大学

の地域での生きがいづくりを考えることである。

【対象および方法】

対象地域：

K島は沖縄本島南部C村から5.3km、船舶で15分の距離にあり、定期船が1日6往復し、日常的に本島と往来可能で利便性がある。伝統的に男性は漁業、女性は農業を中心に営んできた。人口247人、65歳以上の高齢者は110人、高齢化率44.5%と離島平均19.3%を上回っている（平成12年3月末現在）。人口構成上の特徴は、20代～50代の女性が総人口の8.5%と極端に少ないことである。K島は女性が神事を司る「神の島」として知られるが、女性の減少により神事の継承も危ぶまれている。島民の交流は、月に1～2回の神事が主で、婦人会、青年会などの団体はなく、老人会活動も活発ではない。島内の活動団体は、郷友会や島民有志で組織した「K島振興会」がある。平成14年度に住民主体の地域づくりへ向け、沖縄県の介入により島民によるワーキンググループが結成され活動している。

介護保険サービスは、訪問系サービス、福祉用具の貸与・購入費の支給で、通所系や短期入所系サービス、施設サービスはない。介護予防・地域支え合い事業は、配食サービス、月1回のミニデイサービスがある。

対象：

K島ワーキンググループメンバーで27人の島民、村役場職員、県や大学関係者
平成14年2月現在、K島に住民登録している65歳以上の全高齢者110人中、「K島高齢者介護意識等調査票」により面接調査の可能な有効回答者91人
平成15年2月現在、K島に住民登録している65歳以上の全高齢者115人中、「K島高齢者ニーズ調査票」により面接調査の可能な有効回答者83人

方法：

平成14年9月～平成15年7月まで、月1～2回開催されたワーキンググループ討議（以下、「グループ討議」と略）は17回であった。高齢者の生きがいづくり活動「ふれあい広場」誕生に関連すると考えられる議題を報告者らで選択し、17回中12回のグループ討議内容を検討した。

「K島高齢者介護意識等調査票」を作成し、個別訪問により面接調査を行った。調査項目は、島への愛着、介護意識等、健康状態・日常生活、人的ネットワークに関することで26問設定した。この調査項目から、生きがいづくりに関連する項目として島への愛着から「生活の満足度」「神事の継承」、介護意識等から「介護の場」「人生最期の居住」、健康状態・日常生活から「生活自立度」「一番の楽しみ」、人的ネットワークから「島民の知人の範囲」「隣人との往来頻度」「隣人への支援意識」「買い物・用事の依頼」「買い物・用事の依

頼受け」を抽出した。

「高齢者ニーズ調査票」は、グループ討議で検討された内容で調査項目が作成された。調査項目は7項目で、高齢者の活動、日常の食事、日常の運動、サービス提供のしくみ、緊急時支援体制、生きがい、高齢者サービス評価で31問であった。この調査項目から、生きがいづくりに関する項目として「高齢者の活動」を抽出した。

「K島高齢者介護意識等調査」時の平成14年3月から平成15年7月まで、時間軸で調査結果に基づくグループ討議内容、高齢者ニーズ調査結果を交え、高齢者の生きがいづくり活動「ふれあい広場」誕生までの経過を検討した。

倫理的配慮は、ワーキンググループを組織した時点で、討議内容は記録され、公開されることへの了解が討議メンバーから得られている。また、調査結果は数的処理を行い個人が特定できないよう配慮した。

【結果】

「ふれあい広場」誕生までの経過を情報収集、高齢者ニーズ確認、実施計画作りおよび実施の4段階に分類した（図1）。

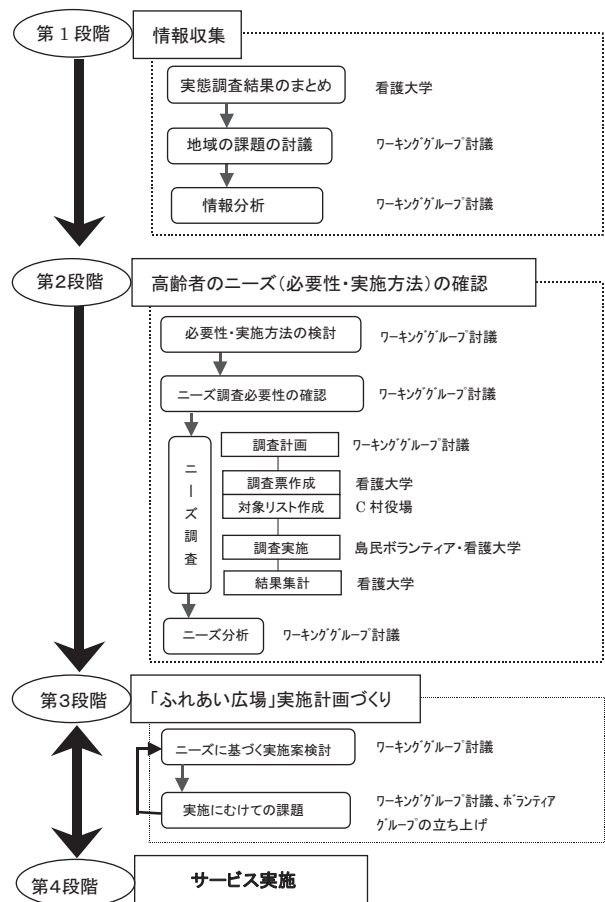


図1 「ふれあい広場」誕生までの経過

第1段階 情報収集：「高齢者介護意識調査」の結果と、グループ討議で情報収集した。

1) 「高齢者介護意識調査」結果概要：(表1)

有効回答者91人中、男性は34人、女性は57人であった。年齢は前期高齢者45人(49.5%)、後期高齢者46人(50.5%)。世帯構成は単身者26人(28.6%)、老人のみ世帯46

人(50.5%)であった。性別では、女性の後期高齢者が多く(P<0.05)、世帯構成は、女性が単身世帯で有意に男性に比べ高かった(P<0.05)。

(1) 島への愛着

島の生活の満足度は、男性27人(79.4%)、女性46人(80.7%)が「満足」「やや満足」と答え、高齢者の約8

表1 対象者の概要と介護意識等

N=91

		男性 N=34(%)	女性 N=57(%)	計(%)		
対象者の概要	年 齢	65～74才	22 (64.7)	23 (40.4)	45 (49.5)	*
		74才以上	12 (35.3)	34 (59.6)	46 (50.5)	
	世 帯	単身	5 (14.7)	21 (36.8)	26 (28.6)	*
		老人のみ	23 (67.6)	23 (40.4)	46 (50.5)	
他世代と同居		5 (14.7)	12 (21.1)	17 (18.7)		
島への愛着	島の生活の満足度	満足・やや満足	27 (79.4)	46 (80.7)	73 (80.2)	
		その他 ¹⁾	7 (20.6)	11 (19.3)	18 (19.8)	
	神事の継承	若い世代に引き継いでほしい	20 (58.8)	45 (78.9)	65 (71.4)	
		若い世代に引き継いでほしくない	2 (5.9)	4 (7.0)	6 (6.6)	
わからない		6 (17.6)	6 (10.5)	12 (13.2)		
その他		6 (17.6)	2 (3.5)	8 (8.8)		
介護意識等	介護を受けたい場	在宅希望	30 (88.2)	48 (84.2)	78 (85.7)	
		施設希望・子どもと同居	4 (11.8)	8 (14.0)	12 (13.2)	
		わからない	0 (0.0)	1 (1.8)	1 (1.1)	
	人生最後の居住	島で過ごしたい	32 (94.1)	51 (89.5)	83 (91.2)	
島外施設・病院		1 (2.9)	6 (10.5)	7 (7.7)		
その他・無回答		1 (2.9)	2 (3.5)	3 (3.3)		
健康状態・日常生活	生活の自立度	自立(杖なしで外出)	31 (91.2)	27 (47.4)	58 (63.7)	***
		杖等で外出	3 (8.8)	25 (43.9)	28 (30.8)	
		一人では外出できない	0 (0.0)	4 (7.0)	4 (4.4)	
		ねたり起きたり	0 (0.0)	1 (1.8)	1 (1.1)	
	一番の楽しみ	働くこと	12 (35.3)	4 (7.0)	16 (17.6)	
		家族と話す	2 (5.9)	11 (19.3)	13 (14.3)	
		ミニデイサービス	0 (0.0)	12 (21.1)	12 (13.2)	
		知人とおしゃべり	3 (8.8)	8 (14.0)	11 (12.1)	
		テレビ・新聞	2 (5.9)	9 (15.8)	11 (12.1)	
		つり・潜り	5 (14.7)	1 (1.8)	6 (6.6)	
その他 ²⁾	10 (29.4)	12 (21.1)	22 (24.2)			
人的ネットワーク	知人の範囲	島民ほとんど知っている	32 (94.1)	56 (98.2)	88 (96.7)	
		その他 ³⁾	2 (5.9)	1 (1.8)	3 (3.3)	
	近隣との往来頻度	毎日・時々行き来する	21 (61.8)	41 (71.9)	62 (68.1)	
		あまり・ほとんど行き来しない	13 (38.2)	16 (28.1)	29 (31.9)	
	隣人への支援意識	自宅を訪ねる・電話をする	22 (64.7)	39 (68.4)	61 (67.0)	
		その他 ⁴⁾	12 (35.3)	18 (31.6)	30 (33.0)	
買い物・用事の依頼	頼める	9 (26.5)	15 (26.3)	24 (26.4)		
	頼めない	25 (73.5)	42 (73.7)	67 (73.6)		
買い物・用事の依頼受け	受ける	20 (58.8)	17 (29.8)	37 (40.7)		
	受けない	14 (41.2)	40 (70.2)	54 (59.3)		

「その他」としてまとめたもの

1) 普通、やや不満、不満

3) 自分の班と隣の班まで、自分の班だけ、あまり知らない

2) ゲートボール、酒を飲む、趣味の活動、特になし、その他

4) 親戚知人に聞く、気になるがそのまま様子を見る

* p<0.05 *** p<0.01

割が島の生活に満足していた。神事の継承は、「若い世代に引き継いでほしい」が男性20人(58.8%)、女性45人(78.9%)で有意差はなかったが女性に高い傾向がみられた。

(2) 介護意識等

介護が必要になった場合の介護の場と、人生最期の居留意識を検討した。介護の場は、全高齢者で78人(85.7%)が「在宅」を希望し、人生最期の居住地は83人(91.2%)が「島で過ごしたい」と希望していた。

(3) 健康状態・日常生活

生活の自立度では、「自立」58人(63.7%)、「杖等で外出」28人(30.8%)であるが、性別では女性の自立度が男性に比べ有意に低かった($P<0.01$)。一番の楽しみでは、男性は「働くこと」であり、女性は「家族との話す」「ミニデイサービス」「知人とのおしゃべり」など他者との交流が最も多かった。

(4) 人的ネットワーク

人的ネットワークは、地域における人と人とのつながりを表すものであるが、人と人とのつながりの広さをみる項目、島民の知人の範囲では、88人(96.7%)が「ほとんど知っている」状況であり、隣人との往来頻度では、「毎日・時々往来する」62人(68.1%)、「あまり・ほとんど

ど往来なし」が29人(31.9%)であった。隣人への支援意識として「近所の人を2～3日見かけないとき」の行動では、「自宅を訪ねる・電話をする」61人(67.0%)で、約7割が隣人に対する積極的な支援意識を持っていた。買い物や用事の家族以外への依頼は、「頼める」24人(26.2%)、買い物や用事の家族以外からの依頼受けでは、「依頼を受ける」37人(40.7%)であった。

2) ワーキンググループ討議：

(1) ワーキンググループ活動の概要

沖縄県は「離島・過疎地域支援事業」の本島付随型のモデル地区としてK島を指定した。報告者らの介入により平成14年9月、ワーキンググループを誕生させた。メンバー構成は、区長や役場職員と相談し本人の了解を得て決定した。住民主体の地域づくりを目的に月1～2回会議を開催している。議事録を残すこと、前回会議内容の確認をすること、全島民に情報公開することなどが特徴である。

(2) グループ討議内容

第1回目のグループ討議は、ワーキンググループの目的確認の後、実態調査結果を島民と共有することから始まった。高齢者の生活の満足度の高さ、神事継承の希望、介護意識は在宅希望で人生最期の居留意識も生まれ島で

表2 高齢者の活動

		計	計%
活動希望 (n=83)	あり	62	74.7
	なし	18	21.6
	わからない・その他	3	3.6
活動回数 (n=62)	毎日	5	8.1
	週3日	6	9.7
	週2日	13	21.0
	週1日	22	35.5
	わからない	6	9.7
	その他	10	16.1
活動時間帯 (n=62)	9時～16時頃	0	0.0
	10時～15時頃	3	4.8
	10時～12時頃	5	8.1
	13時～15時頃	45	72.6
	わからない	3	4.8
	その他	6	9.7
活動場所 (n=62)	集落から近いA施設	32	51.6
	集落から離れている設備の整ったB施設	22	35.5
	その他	8	12.9
活動内容 (n=62)複数回答	軽い運動をする	42	67.7
	おしゃべりをする	40	64.5
	お茶や菓子を飲食する	33	53.2
	ゲームをする	30	48.4
	一緒に食事をする	30	48.4
	カラオケを歌う	29	46.8
	ゲートボールなど運動をする	24	38.7
車での送迎 (n=62)	是非必要	9	14.5
	あると便利	9	14.5
	歩けるのでいらない	39	62.9
	その他	5	8.1

あること等の調査結果が確認された。地域の課題への具体策の糸口としてグループ討議では、隣人の往来頻度に関心を持った。近所づきあいで「あまり・ほとんど行き来しない」が3割以上いることから、高齢者の互いの家を訪問することへの遠慮と孤独感の訴えなどが話題となり、生きがいづくりのために高齢者が気軽に集まれ、若い世代とも交流できる場所「ふれあい広場」が提案された。また、日常生活自立度から外出困難な高齢者に対する送迎の実施可能性についても検討された。月に1度実施されているミニデイサービスの開催回数増加での対応が検討された。

第2段階 高齢者ニーズの確認：具体的実施計画づくりのために「高齢者ニーズ調査」を実施し、高齢者のニーズを把握した。

1) 「高齢者ニーズ調査」前のグループ討議：グループ討議は、「ふれあい広場」の具体的実施に向け計画づくりに着手した。しかし、実施計画づくりも、高齢者ニーズに基づく必要性があることが話題となり、全高齢者のニーズ調査を実施することが決まった。調査計画として、調査票作成は大学教員、対象リスト作成は村役場、調査実施は、ワーキングメンバー中心の島民ボランティアと大学教員などの役割分担、調査内容の検討、整理、確認などが行われた。

2) 「高齢者ニーズ調査」結果概要：(表2)

有効回答者83人中男性は31人、女性は52人であった。ニーズ調査の7項目中、高齢者の活動について検討した。高齢者の活動参加希望は、「参加希望あり」62人(74.7%)、「参加希望なし」18人(21.6%)、「わからない・その他」3人(3.6%)であった。参加希望あり62人の活動希望回数は、週1回は22人(35.5%)、週2回は13人(21.0%)が希望していた。活動時間帯は、13時～15時の2時間程度を45人(72.6%)が希望。活動場所は、集落に近い老朽化したA施設を32人(51.6%)が希望し、設備の整ったB施設希望者は22人(35.5%)であった。活動内容は、「軽い運動」「おしゃべり」「お茶」や「ゲーム」など多岐にわたっていた。送迎は「是非必要」9人、「あると便利」9人で18人(29.0%)が希望していた。

3) 「高齢者ニーズ調査」後のグループ討議

高齢者ニーズ調査の結果、7割の高齢者が活動の場を希望していることを確認し、「ふれあい広場」の必要性と方法を確認した。マンパワーの確保、場所の整備・確保、活動費用、活動日、活動内容等の調整が検討課題としてあがった。

第3段階 実施計画づくり：高齢者ニーズ調査に基づきグループ討議で「ふれあい広場」実施計画づくりを行った。

1) グループ討議での「ふれあい広場」実施案作成：グループ討議では、希望場所の整備方法、週1回程度の

場所利用の可能性、活動に要する費用や予算、送迎車の確保などのハード面の整備、および「ふれあい広場」で活動を推進するマンパワーの確保が討議された。希望場所の暑さ対策、小中学校の車を利用しての送迎等についても検討された。

2) ボランティアグループの結成：予算措置のない「ふれあい広場」活動推進のマンパワー確保のためにボランティアが必要となり、ワーキンググループが中心となって、島民に呼びかけボランティアグループが結成された。

第4段階 実施：平成15年7月ボランティアグループは「ふれあい広場」を開始した。活動場所、頻度、時間帯、活動内容等、確認された高齢者のニーズに基づいて実施している。島外で生活する漁師の島内出身者(K島郷友会メンバー)は、「ふれあい広場」の存在を知り、実施日には、ボランティアとして定期的に参加している。また、活動2ヶ月後、ワーキンググループ代表者らは、村役場の村長および介護予防活動関係部課長へ、「ふれあい広場」活動開始の経過と必要性を報告し、行政での予算措置等への配慮を依頼した。村は、その趣旨と実績を理解し事業化を約束した。

【考察】

1 K島の地域特性と対象特性

女性を介して神事が継承される「神の島」K島において、女性は神事継承に積極的であった。しかし、人口構成で20代～50代の女性人口が少なく、後期高齢者の女性が多く、日常生活自立度で女性の自立度は男性と比較して有意に低く、「杖などで外出」が多かった。K島の特性として、地理的な利便性の一方で、介護の担い手として期待される女性人口の少なさによる島内での介護力の弱さや各種団体活動基盤の弱さなどがあった。しかし、高齢者の生活の満足度は高く、全国比でK島の高齢者の生きがい感が高い⁷⁾、伝統行事に携わる者は生きがい感が高い⁸⁾という報告もあり、K島のアイデンティティの根幹とも思われる神事を生きがいづくりに積極的に活用することの重要性が示唆された。

2 介護意識と人的ネットワーク

高齢者の8割以上は島の生活に満足し、介護を受ける場は「在宅」、人生最期の居住地としてはK島を希望していた。この希望実現の可能性を探るため、人的ネットワークとして「知人の範囲」「近隣との往来頻度」「隣人への支援意識」の3項目で、直接的に何かをするのではないが、情緒的なつながりを表す「情緒的サポート」について検討し、「買い物・用事の依頼」「買い物・用事の依頼受け」の2項目で、直接的な支援を表す「手段的なサポート」について検討した。島の人口サイズから島民の知人の範囲は9割以上と高く、近隣との往来頻度や隣

人への支援意識も約7割と高いことから、高齢者相互の安否確認など情緒的サポートの可能性が示唆された。しかし、買い物・用事の依頼授受は3～4割と低く、手段的サポートの期待は困難のように思われた。K島は、他の沖縄県離島のソーシャルネットワークと比較し⁹⁾、島民の知人の範囲の高さや情緒的サポートの可能性は同様であったが、手段的サポートは低かった。手段的サポートは、加齢に伴い低下するとの報告¹⁰⁾もあり、K島の後期高齢者率の高さが手段的サポートに影響していると考えられる。K島においても、人生の最期を迎えるための高齢者の役割として情緒的サポートは期待できると推察された。しかし、介護を必要とする高齢者が人生の最期を在宅で迎えるためには、直接介護の担い手は重要であり、高齢者間の情緒的サポートのみでは問題解決しない。特に介護者として社会的に期待される若年層の乏しいK島で、高齢者の希望実現は厳しい状況とも思われる。しかし、地理的利便性と郷友会を加えた「K島振興会」を活かし、戦略的に郷友会を介護マンパワーとして活用することで展開の可能性があると考えられる。

3 住民主体活動としてのグループ討議の役割

沖縄県の介入で「本島付随型」離島のモデル地区になったK島では、住民主体活動をめざし島の代表者、役場職員、県、報告者らで構成するワーキンググループが結成された。グループ討議は、月1～2回定期的に開催され、討議内容は通信発行で全島民に情報公開されている。グループメンバーは高齢者介護意識調査結果の共有から、3割以上の高齢者が「あまり・ほとんど行き来しない」ことに着目した。高齢者の日々の生活を思い起こし、孤独感の解消、仲間づくりの必要性を導き、交流の場「ふれあい広場」提案に至った。グループ討議での検討は、「高齢者ニーズ調査」結果を基礎にし、「ふれあい広場」の準備、実現に繋がった。

「離島・過疎地域支援事業」の先行モデル島でも、高齢者実態とニーズに基づくサービス誕生という同様の手法でサービスが開始されている¹¹⁾。高齢者の生活に根ざした手作りのサービスを、住民のワーキンググループを中心にして展開することは、K島でも可能であった。この手法は、離島における住民主体の地域づくり活動には有効であることが示唆された。

4 生きがいづくりから地域づくりへ

在宅高齢者の生きがいづくりには、家族、友人、地域とのつながり重要であること¹²⁾、施設入所者の生きがいとして家族、友人が最も多くなっている¹³⁾ことなどの報告がある。高齢者にとってなじみの関係の維持が生きがいにつながることは報告されており、これまで相互交流の場の乏しかったK島において気軽に集まれる場「ふれあい広場」は、K島の在宅高齢者の生きがいにつながると考える。また、社会的な役割を担うことが生きがい

に繋がるという報告もあることから¹⁴⁾、「ふれあい広場」での自立高齢者の自主的な活動を促し、支えていくことも重要である。

この活動開始に向け、ボランティアグループが結成され、休会中の老人会活動も再開し、地域の組織基盤もできつつある。K島の本島との利便性の高さは、人の動きの活性化の可能性に繋がる。高齢者の生きがいづくりの場として誕生した「ふれあい広場」には、友人、家族、地域との交流の場、子ども世代、孫世代との交流の場、文化継承の場としての島内の交流拠点に留まらず、利便性を活かした島外施設入所者の生きがいづくりの場、郷友会など島外生活者のふれあいの場など、島外との交流の拠点としての展開を期待したい。

引用文献

- 1) 沖縄県:沖縄県高齢者離島・過疎地域支援計画 - 波照間島をモデルとして -, 57-76, 2001
- 2) 離島振興基本方針:総務省・農林水産省・国土交通省告示第2号, 1, 2003
- 3) 離島振興ハンドブック, 1-5, 1996
- 4) 沖縄県:沖縄県高齢者離島・過疎地域支援計画 - 波照間島をモデルとして -, 3, 2001
- 5) 大川嶺子・大湾明美・佐久川政吉・吉川智恵子・伊藤幸子・宮城重二:沖縄県有人離島における地域ケアシステム構築に関する研究(第13報) - 「本島付随型」離島の高齢者保健福祉の特徴 -, 民族衛生, 68(付録), 60-61, 2002
- 6) 下地幸子・大湾明美・佐久川政吉・大川嶺子・安里恵子:離島における施設入所高齢者の生きがいづくり(第7報) - 要介護高齢者が沖縄本島から竹富島にふるさと訪問した事例 -, 第20回看護研究集録, 85-88, 2002
- 7) 奥古田孝夫・赤嶺依子・具志堅美智子:沖縄における地域高齢者の self-esteem(自尊感情)とその関連要因についての検討, 医学と生物学, 144(5), 147-151, 2002
- 8) 豊里武彦:高齢者の主観的幸福感および健康状態と唾液中免疫関連物質に関する心身医学的研究 - 久高島における実地調査研究 -, 平成13年度修士論文, 2001
- 9) 大川嶺子・大湾明美・仲間富佐江・吉川千恵子・塚本恵・佐久川政吉・金城利香・伊藤幸子・上田礼子:沖縄県有人離島における地域ケアシステム構築に関する研究(第2報) - ソーシャル・ネットワークに関する波照間島民の意識 -, 民族衛生, 66(付録), 94-95, 2000
- 10) 河合千恵子・下仲順子:老年期におけるソーシャル・サポートの授受, 老年社会学, 14, 1992
- 11) 村上恭子・大湾明美・佐久川政吉:沖縄県有人離島における地域ケアシステム構築に関する研究(第9

- 報) - 波照間島における生きがいサービス1年間の現状と課題 - , 第18回沖縄県看護研究学会講演集, 89-92, 2002
- 12) 松田晋哉・筒井由香・高島洋子: 地域高齢者の生きがい形成に関連する要因の重要度の分析, 日本公衆衛生学会誌, 45(8): 704-712, 1998
- 13) 山下昭美・近藤享子・田中隆・門奈丈之・揖場和子・木下迪男: 施設高齢者の生きがい感とQOLとの関連について, 厚生指標, 48(4): 12-19, 2001
- 14) 板垣恵子・渡辺喜勝: 現代社会を生きる人々の生きがい, 東北大学医療技術短期大学部紀要, 9(2): 257-266

An Expectation to The Action for Fulfillment of Life in K Island, an "Adjacent-to-Main-Island Type" Isolated Island

- Organizing of "Fureai Hiroba" for Elderly by Inhabitant Centered Activities -

Mineko OKAWA, R.N.,P.H.N., M.N., Akemi OHWAN, R.N.,P.H.N., M.N.,
Sayuri KURECHI, R.N., P.H.N., M.N., Naoko OGAWA, R.N., P.H.N., M.H.S.,
Masayoshi SAKUGAWA, R.N., P.H.N., M.N.

The authors are supporting the inhabitant centered community organization in K Island. The purpose of this research is to discuss about fulfillment of life of the people in the adjacent island with high convenience with mainland Okinawa. Subject area K Island, which is known as an island of gods, belongs to C Village in the southern region of main island of Okinawa. Subjects are: the members of the inhabitant centered working group; the 91 elderly, out of 110 who were more than 65 years old and had resident registration in K Island at February 2002 and replied with valid answers to "K Island Home Care Consciousness Investigation"; the 83 elderly, out of 115 who were more than 65 years old and had resident registration in K Island at February 2003 and replied with valid answers to "K Island Elderly Needs Investigation". The study design is: examination of 12 discussions of the working group, out of 17 of them, that were held once or twice a month in the period from September 2002 to July 2003; selecting the 11 questionnaires which were related with fulfillment of life from "K Island Home Care Consciousness Investigation"; selecting the 6 questionnaires which are related with fulfillment of life from "K Island Elderly Needs Investigation"; examining the two investigations and 12 discussions about the process of creating "Fureai Hiroba" in the period of March 2002 to July 2003.

Result and Conclusions: 1) Turning the god events to good account for the activities of fulfillment of life is important. 2) Because of the high convenience with the main island, turning the "K Kyoyuukai"; peoples group who once lived in K Island and now live in main island of Okinawa, to good account for the manpower of Kaigo; 3) The working group discussions as an inhabitant centered activity were based on the results of a needs investigation, and created "Fureai Hiroba" which met the individual needs of elderly; 4) "Fureai Hiroba" was born through an action for fulfillment of life of the elderly. This is not only expected as a place of exchange for the people in the island, but also the fulfillment of life for the institutionalized elderly in the main island and the exchange with the people living outside of the island such as "K Kyoyuukai" members.

Key word: fulfillment of life, isolated island, elderly, inhabitant centered